

うな小道にはいと、ひたすら林道を登ってゆく。やがて、ブナ林があらわれ尾根上につくと野々海池。まず手前の小池からさっそく観察、採集を始める。奥原氏にミヤマシラスゲ、ヌマガヤ、カンガレイ、ミヤマホタルイなど湿性植物を教わる。霧の野々海池畔を歩いて池に流入する小沢を登ってゆく。途中で、ザゼンソウ、ミヤマシシガシラ、オクノフウリンウメモドキ、チョウジギクなどを見ながら、いよいよ、お目あてのオニシオガマ、オオバツツジの地点につく。オニシオガマは数株が花をつけており、かわるがわるフラッシュで撮る。両者とも寒い時代

からの生き残りと考えられ弱々しい感じであった。しだいに霧も晴れてきた湖畔で昼食。後に車で新潟県側に降りてみる。峠ではヒメカイウを発見、林道わきで点々と群れ咲いているオニシオガマに出合い驚いた。静岡から参加の井波氏はカリヤスモドキと並んで生えていたオオヒゲナガカリヤスモドキに感激。さらに、下の畔でもオニシオガマを見つけた。松ノ山温泉まで足を伸ばして、裏山を一回り、コシジタピラコ、ミヤマアキギリを採る。ここで解散、一部の人は温泉を楽しんだ。新しい発見もあり有意義な会であった。

〔秋季例会合宿調査報告〕

天竜川流域の植物採集

伊 藤 文 男

第103回例会は、昭和59年10月20日(土)～21日(日)、下伊那郡の南端の静岡県、愛知県に隣接する天龍村を会場に植物採集会が行なわれた。晩秋の時期なので暖帯地の植物の自生する当地を選定した。参加者は当日の参加2名を加えて、奥原弘人、和田清、古谷義人、中澤袈裟延、中村英夫、卯ノ原慶助、佐々木政臣、小口好久、渡辺隆一、幹事の馬場多久男、案内役の下平洋雄、伊藤の12名であった。

第1日目。参加者の大方は午後6時までに市橋旅館に集合した。夕食前には幹事の馬場先生が持参された植物標本について奥原先生の説明を聞き論議に花を咲かせた。今日は小雨の天候であったので、夕食時には明日の快晴を祈念して地酒の喜久水で乾杯をした。自己紹介を兼ねて寄せ書きを行ない、それぞれが近況を語り談笑した。夕食後は和田先生が豊丘村に出かけて、本年5月に2昼夜にわたり延焼した山火事の跡地を視察してこられたのでその状況聞き、山中で採集された植物を見ながら意見の交換を行なった。

第2日目(10月21日)当日参加者は市橋旅館にて合流し、午前8時出発。日本の気圧配置が昨日と変わりやや寒い日となったが、厚い雲は去り、秋晴れの日となって一行は喜ぶ。午前中は天龍川の龍西地区の松島、長沼地籍を、午後は龍東側の満島、下山、中井侍と龍西側の坂部まで湖岸通路に沿って採集を行なう。採集地の標高は260～370mの地域である。

旅館を出て天龍川の堤防に出る。途中シュロ、ヤラビ、ウラジロガシ、アラカシ、マンサク、ジュウモンジシダ、スルガテンナンショウ、ヒサカキ、ヤ

ブツバキ、アラカシ、ヤブミョウガの採集。またモウソウチクの見事な竹林を見る。満島と対岸の松島にかけられた大橋は昨年秋の10号台風で流失したので仮設道路を通り対岸につく。松島、長沼地籍の採集を開始する。

道路沿いの崖にはオオバエノモトソウの群落が見事である。群生するヤブミョウガの果実は黒色に色づいており、ヒヨドリジョウゴの鮮紅色の果実、カニクサの^{つぼ}葉は2m以上に生長し孢子葉が見事である。一行は標本採集と写真撮影に余念がない。奥原先生がアズマヤマアザミを見つけて「低地に咲いていることは珍らしい」と言いながらアザミ談議が続く。この辺の植物は、ヤブツバキ、アラカシ、アオキ、ヤブミョウガ、テイカカズラ、ナンテン、ヤマハゼ、イワデンダ、ヒメワラビ、ミヤマイボタ、モチツツジ、ヤブウツギ、アカメガシワ、リンドウ。

路傍にスルガテンナンショウが赤い実をつけている。奥原先生はこれを見て偽茎や附属体の説明を始めると一行は集まり聞き入る。ベニバナボロギクが多く目につく。近年急速に分布が拡大しているが、戦後ダンドボロギクが伊那谷に侵入し群生すると住民は「終戦草」と呼びその繁殖力の旺盛なのに驚いたが今では衰退している。やがて平岡ダムの堰堤に出る。峡谷の紅葉が美しい。この附近の路傍には、アオミズ、ヒナタイノコヅチ、カラスノゴマ、クズ、ハナタデ、ヤマウルシ、コンテリギ、シバヤナギ、クラガリシダ、ウロコノキシノブ、ゴマナ、クマワデシャジン、ヤマハゼ、リンドウ、ヤマユリ、アオミズ。

沢にはシロヨメナやカシワバハグマが花ざかり、特にセキヤノアキチョウジの群生の花ざかりは見事である。暖地に多いノアズキの紫色鮮明な果実は人目をひく。これらの植物の写真撮影に一行は一生懸命である。

この道路には数個の小さなトンネルが連続してあるがこの附近の沢には豊かな植生がみられる。ジンジソウの群生が開花中で素晴らしい一行は歓声をあげた。奥原先生は「ジンジソウだ、これはよかった、よかった、下伊那では遠山谷に少しある……」と話を続ける。クラガリシダ、ウロコノキシノブ、マメヅタ、ゴマナ、ナガオノキシノブ、モチツツジ、セキヤノアキチョウジ、ハコネシダ、イワギボウシ、イワタバコ、ミツデウラボシ、コンテリギ、ヒメカンズゲ、キンミズヒキ、ウラゲエンコウカエデ。

トンネルを過ぎて坂道を上る。樹林内にはトチの大きな木があり、この樹幹にビロードシダ、サジランが着生し群生していてすばらしい。一行は熱心に写真をとる。スズカアザミが路傍に点在している。ナキリスゲを見つけた奥原先生は「秋に実をつけるスゲはこれ一種である。木曽や北の寒い地方には少なく暖かい地方に多い」といわれた。このあたりには暖

帯の植物のコンダが自生している。キョタキシダ、ナライシダ、フサアジサイ、ガンクビソウ、サラシナショウマ、コシオガマ、キバナアキギリ、シンミズヒキ、ノアズキ、アオキなど。

午前11時20分に折り返し、今きた道を戻り暖帯の植物の多い地点で一行の記念写真を取り、満島にて昼食。午後は1時から3時までを採集予定として計画し、アオネカズラとツクバネガシの稀産種の採集を主目的に出発する。道程は凡そ13kmで自家用車に分乗して出かける。採集地は満島、下山、中井侍、坂部などである。暖帯に分布するアオネカズラは県内では天龍村が産地である。険しい岩壁にあるので採集は困難であったが標本に3株を採集してそれを一行は記録写真におさめる。

中井侍の植物、オオアオツツラフジ、カラスザンショウ、マツカゼソウ、アカメガシワ、アラカシ、ウラジログシ、ヤブコウジ、テイカカズラ、コバノヒノキシダ、チャセンシダ、マメヅタ、ヤブミョウガ、カニクサ、アオキ。

ツクバネガシは県境地にて国道1号線の路傍にて採集して目的を達成し、天龍川流域の植物採集行を終了して午後3時20分現地解散となった。

佐野泰先生を悼む

車をすこし走らせると、さすがのバラボラアンテナも高原野菜の畑に吸収されてしまう。そんな野辺山高原で大学農場の片隅に先生は小さな試験区をお作りになった。ヒマワリ、クロユリ、アキノキリンソウ、Campanula 等。高冷地における作物選択の可能性をエネルギー収支の面からみたいと、私はトモロコシとダイズで、先生は野生植物の側から攻め始められた。82年御入院の前年のことである。この試験区で、先生が志向されたこと、それが農学の将来を見通した射程距離の長い仕事であったとは私にもわかる。しかし、先生の研究の何本もある柱の中でどのような役割を考えておいでだったか、その夢を聞くことはもうできない。

30余年まえ、植物ホルモンと休眠の関係を中心とした仕事で研究生活に入られて以来、精度の高い実験を繰り返してこられた。ホルモンの定量は今も楽しいと伺ったのはごく最近のことに思える。また、発芽条件の種あるいは品種間差を花卉、食用作物、高山植物あるいは雑草で克明に調査を繰り返し、リンドウの組織培養も手掛けておいでだった。

こうした研究室内での精緻な実験がお好きだった一方で、氏原さん達との木曽駒ヶ岳の植生調査の楽しさはまた格別のような感じがした。ロープウェイ架設前後の千畳敷カールのお花畑変容の記録写真は佐野先生ならではのと言われている。しかも、その変化を固定桿調査で定量的におさえてこられた。

思い付くままに挙げるだけでも、続けて来られた研究の幅の広さ多様さに改めて驚く。氏原さんと私にとって、先生との最も大切な思い出の一つ、クロユリとハイマツを調べて中央アルプスから利尻島へ巡り歩いた日々、スカンジナビア、ヨーロッパアルプス、スコットランドをマツの年間生長量を測って廻った時のこと。それさえも小さく思えてくる。

医師から、少し薬が効きはじめたことと喜びの電話を受けたのは8月末、9月7日には、朝日園芸百科の校正が終ったと嬉しそうでした。9月14日、先生の危篤を報せる電話が私を捜しているとは露知らず、データ整理の相談をしたいと王滝地震で遅れた新幹線で京都へ向かっておりました。

(俣野敏子)